

<書評論文>

1920年代の新たな女性像の誕生

—— モダンガール、主婦、職業婦人 ——

Barbara Sato,
*The New Japanese Woman: Modernity, Media, and Woman
 in Interwar Japan*
 (Duke University Press, 2003)

織 田 暁 子

1. はじめに

日本の女性の地位は、第二次世界大戦に敗戦した後に、劇的に変化したといわれている。新憲法がつくられて家父長制が崩れたり、女性に参政権が認められたりするなど、大きな変革があったことは事実である。しかし実際は、終戦後に突然制度が切り替わったわけではなく、それ以前、1920年代に変化の兆しが見られていた。1920年代は、第一次世界大戦や産業発展に伴い、世界的に大きな転換期であった。日本でも同様に、さらに関東大震災によって首都東京が新しく生まれ変わるなどの変革を迎えていた。

本書は、主に1920年代の消費主義の勃興の中での都市女性の日常生活に着目している。従来の日本女性の研究の多くは、時代の先端を行く女性知識人たちの言説や運動を扱ったものであった。しかし次第に、知識人だけでなく、一般の人々の日常生活を知ることが重要であると考えられるようになった。しかしこれらの人々の史料は少なく、それを掴むことは難しい。著者Barbara Satoは、人々の間に広く読まれていた女性雑誌を用い、そのトピック、内容、知識人たちの言説について分析を行い、1920年代の都市女性の日常生活と彼女たちが抱えていた問題について明らかにしようとした。また「モダンガール」、「主婦」、「職業婦人」といった新たな女性像について論じる。

本書は5章構成となっている。まず第1章「エージェンシーの出現：女性と消費主義」

では、女性のアイデンティティが変化する転換点と定義づけられる1920年代の都市女性の地位について、第2章「消費文化の表象としてのモダンガール」では、消費社会発展に伴い発達した、メディアとモダンガールについて論じる。第3章「読書をする女性としての主婦」では、女性雑誌が都市の女性の生活の変化を映していることを示し、第4章「生活のため、結婚のため、愛のための仕事」では、労働市場に進出した新たな「職業婦人」について、雑誌の投稿記事などをもとに分析し、彼女たちが「修養」を強く意識していたことを明らかにする。終章である第5章「前途困難な日々：進行する女性」では、1920年代以後、女性や結婚のあり方がどのように変遷したかを追う。本書の構成にしたがって、1920年代の日本女性が雑誌の中でどのように描かれてきたかを中心にまとめ、現代日本の問題と関連付けて書評したい。

2. 近代化と消費主義の中の女性像

第1章ではまず、明治以後、1920年代に至るまでに女性がどのような経路を辿ってきたかを論じる。明治憲法は人々の権利を保護することにつながったとされる一方で、女性に「良妻賢母」を求め、それを正当化することで、法的・社会的に従属させることにつながった。この中で、1910年代に雑誌『青鞥』の流れをくむ「新しい女」が女性解放の理想を掲げ、男女の社会的不平等に疑問を投じた。主に高学歴知識層からなる彼女たちは、ジェンダー関係を脅かす存在であるとして批判された。この女性の社会的・政治的権利の主張はメディアに取り上げられて広がっていく。しかしメディアは「新しい女」の社会規範からの逸脱を誇張して批判し、さらにその逸脱イメージを強化していった。

1920年代初期、消費社会の起こりはそれまでの生活のあり方に大きな影響を与えた。質素・儉約といった美德を脅かし、「もの」を切望する消費主義が勃興した。都市女性は消費社会と結びつき、「モダンガール」や「職業婦人」、「主婦」といった3タイプの女性が生まれた。街にはモダンの象徴としてのネオンライトやダンスホールが見られ、主婦の仕事は商業化された。洋服や料理に関する消費市場が生まれ、ホワイトカラーの余剰金で消費された。

日本における第一次世界大戦後のシンボルは、アメリカと女性であった。当時の消費文化・モダンカルチャーを牽引するアメリカに惹かれ、日本は「アメリカナイゼーション」の道を辿る。しかし多くの知識人は消費主義やアメリカニズムはアメリカのブルジョアによる文化だとしてこれを拒絶していた。それでもこうした新しい消費文化は、女性の文化と結びつき、女性が消費文化の象徴となっていく。

第2章では、「モダンガール」について論じる。西洋ファッションに身を包み、ボブヘアの「モダンガール」は消費主義の典型的な像として広く受け止められた。しかしモダンガールは女性雑誌によってつくられたイメージにすぎなかった。1925年の銀座の調査では、和装の男性は33%だったのに対し、女性は99%が和装であった。「仮想モガ」の増加と現実には著しい乖離があった。しかし洋装の男性が扇情的に語られることはなく、このことからモガは社会的構築物であることは明らかである。モガのイメージはホステスや売春婦、不貞の妻といった性的・社会的退廃の象徴として、また職業婦人と重なるイメージを投影し、日常生活の変化を示す象徴として用いられた。

モダンガールは様々な観点から批判された。まず、「新しい女」とは違い、社会的・政治的な意識はなく、目新しいファッションにとびついただけだとして、軽薄な一時的流行とみなされた。社会的な達成を省みず、自分の内面のみのモダンをめざしているわがままで倫理のだらしない女性であると批判された。さらに、衝撃的な恋愛事やモガの性的逸脱がネガティブに誇張されて描かれ、モガの性的非行イメージが強化された。モガは「誘惑する女」という受け止め方がなされ、モガと性的なイメージを結び付けた記事が増えることで、ますますモガに注目が集まる結果となった。社会主義者たちは、消費主義やモガのイメージはブルジョアの策略で、女性の本当の問題から眼をそらさせていると批判し、モガは余暇階級の産物に過ぎず、墮落・享楽主義の象徴だとした。

一般的にモガは不快な流行であると捉えられていた一方で、一部では肯定的な見方もなされた。モガを職業婦人と同義語とみなし、経済や労働への進出の一環と捉えたり、権威主義の崩壊のあらわれと捉えたりする知識人も存在した。モダンガールは消費主義の最もセンセーショナルなイメージとして際立っていた。

3. 女性雑誌の中の女性

消費社会は1920年代の女性雑誌の激増を生み、これが3タイプの女性の出現を生んだ。第3章では、女性雑誌とその読者である主婦について論じる。1920年代、女性雑誌は高い識字率と安価な価格設定に支えられて広がり、新たな女性読者を取り込んでいった。雑誌によって、農村の女性や主婦もモダンで洗練された情報に接する機会を得た。読者の増加に伴い、雑誌が扱うテーマも多様化していく。20世紀初頭は女性問題を扱う啓発目的の記事が多かったが、この頃最も関心あるテーマは家庭に関することだった。お茶やお花、短歌といった女性文化を扱った記事や、西洋料理のレシピや掃除、裁縫に関する実用記事が掲載された。そして主婦の役割として、子供を育て、家事を行い、夫に性的に奉仕するこ

とが示された。これらの記事は、女性に良妻賢母の規範と、忍耐や貞節の大切さを教えた。女性雑誌の女性の表象は家父長制システムにもとづいていたが、多くの読者はそのジェンダーロールに疑問を持たなかった。こうした記事の構成のために、女性雑誌を読むことは知識を身につけることにはならない、個人の利益を求めているにすぎないとの批判もあったが、最新のファッションやヘアスタイルなどを扱う流行記事は女性読者を刺激した。

次第に、雑誌は双方向的な存在になっていく。告白記事では、読者の女性が自らの生活や恋愛事、セクシュアリティに言及した。たとえば義父母と同居する嫁の憂鬱や悲劇は多くの人に共通する不満であり、こうした記事が女性たちの共感を呼んだ。またスキャンダラスで淫らな恋愛記事は、閉鎖された世界にいる主婦にもファンタジーの材料を与えた。一方でこれは、センセーショナルに語られてネガティブな批判を受け、女性には社会的逸脱が許されないことも示している。こうして女性雑誌は、読者に愛や生活について考える機会を与え、多くの女性が精神的な独立を目指し始めた。

第4章では、職業をもつ女性について論じる。イメージが先行したモダンガールとは違い、「職業婦人」は統計に基づいた現実の存在である。彼女たちは男女に分けられていた社会的境界を越えた。こうして男社会の中へ突き進む職業婦人の告白記事が雑誌に載ることで、主婦の中にも父や夫、家に従っていることへの疑問が生まれた。

しかし女性の職業的地位は決して高くなく、賃金は男性より低かった。男性は、職業婦人を自分たちの仕事を助け、職場を円滑にする存在と捉え、時には性的対象と見なしていた。女性たちは、バスガール、デパートガールなどと「～ガール」をつけて命名され、性的シンボルであった。都市文化のエログロという特徴、とくにエロの側面が、客寄せのために女性に仕事を与えたのである。雇用者は女性に、低賃金、ジェンダーロール、セクシュアルなイメージを期待していた。

女性が職業につく動機は、経済要因と「修養」のためと、大きくふたつに分かれる。まず経済要因として、家計を助けるため、経済的独立を達成するため、結婚資金のためというものがあげられる。この「独立」を多くの知識人は社会意識、精神的な独立であると誤解していたが、実際の彼女たちは生きるために働いていた。第一次世界大戦までは、若い女性が仕事をするのは家族の経済難を示すネガティブなイメージが伴っていたが、大戦の荒廃で自立が強いられ、女性の労働に対するイメージは変化した。しかし女工になることに対するスティグマは存在し続けた。

「修養」とは、人格を構築し、倫理を鍛え、精神的・文化的に成長することを指すが、彼女たちにとってのそれは、難解なものではなく、個人的な自分自身の発展を意味した。その一環として、仕事も修養の一部と考えられた。仕事をすることは社会と関連してよい

マナーを身につけることになるので、結婚に必須であると考えられるようになった。仕事をした経験が、結婚後の夫やその家族と同等の地位を得ることにつながるというポジティブな考えや、結婚できない恐れがあるというネガティブな考えの両方が示されていた。結局雑誌はラディカルな変化をもたらさなかった。結婚は女性の目標であり、女性の幸せは夫に依存するという考えは、一向に変わらなかった。職業婦人は、結婚したらすぐに魅力的な主婦へと姿を変える。家事は天職と捉えられ、経済は夫に依存していた。また、見合いで結婚することを嫌がり、恋愛結婚が理想であるという語りも見られるようになる。しかし親に従わずに結婚したが、結局それは一時の気の迷いにすぎなかったというネガティブな記事も見られる。愛に対する意識が揺れ動きつつ、変化し始めた。

第5章では、さらに結婚について論じ、1920年代以降の女性の変遷について説明する。中流階級の女性たちは、社会的地位を獲得して生きるより、主婦として生きることを選んだ。1930年代になると日本は全体主義の道を辿り、滅私奉公が叫ばれ始めた。女性が職をもつことは、個人の独立の問題ではなく国富のために欠かせない事柄として、当然のこととなった。国家を強くするためによい結婚をし、子を生むことが求められ、見合い結婚が強く推奨された。第二次世界大戦は、それらの状況を一変した。憲法改正によって結婚や離婚をめぐる状況は変わり、女性に参政権が認められた。しかし直後の選挙では39人もの女性議員が誕生したものの、その数はすぐに激減し、1950年代には、1桁まで落ち込んだ。恋愛結婚もなかなか増加せず、ようやく見合いと同数程度にまで増えたのは、1960年代になってからのことだった。それでも1920年代にはじまったモダンガール、職業婦人、主婦といった生き方や、仕事の理想、愛、結婚の選択などに象徴される女性の変化は、第二次世界大戦後の日本で受け入れられていく。

4. 日常生活を知るための手法

本書では、普通の人々の生活や考え方を知る手段として、多くの大衆女性雑誌を利用している。しかしこれは、いくつかの危険性と難しさを孕んでいる。

女性に着目し、女性特有のメディアの中の女性を分析することは、女性を歴史の中で位置づける上で役立つ一方で、女性を特殊なものとして扱い、周縁化しかねない。つまり女性を可視化することは、すなわち差異化することでもあり、男女の性差を殊更に強調する結果となりかねない。男性支配的な社会の中で女性が重視されてこなかったことは事実である。しかし女性の世界の存在を実証するとき、そのこと自体が目的化してしまうと、意図したところとは違う結果を導く可能性もある。(Scott 1999)

知識人の言動の分析に偏っていた女性史の中で、それ以外の人々の日常生活を分析しようとする動きは意義あるものである。一般にこの時期の女性史は、女性解放運動などに取り組んだ女性にスポットがあてられることが多く、一般大衆の文化とは異なる特殊な文化が取り上げられていた。また女性の中の差異もなかなか着目されなかった。女性を同一の集団と見なすのではなく、女性たちも出身階層や生活環境、また個人差によって異なる考えや文化をもっていたという視点をとることは、非常に意味のあることである。

しかし一般の人々のことを論じる際も、知識人が編集した雑誌記事を引かざるを得ないというジレンマはある。文書化されている史料は知識人によるものが圧倒的に多く、さらに雑誌の「客観的」評価や評判も、知識人たちの手によって書かれている。知識人たちが一般の人々を評価する際、ときに偏った見方をしたり、言動に一方的に意味を付与したり、誤解したりする。それを単純に否定するだけでなく、実証可能な言説や正当な批判はどれなのか、そしてそれはどのような判断基準で決めるのかを明らかにしなくてはならない。

雑誌は編集者や出版社の意図が加わっており、決して中立の存在ではない。たとえ「告白記事」であったとしても掲載を選択する上で編集方針に影響される。調査であっても、調査者の意図が働いたり、調査対象に偏りがあったりすることが考えられる。すべて構築されたものにすぎず、資料の中から「現実」を取り出すことは難しい。さらに、「語られなかった」ことも多く存在する。それは暗黙の了解で沈黙を強いられていたのか、それともその事柄は意識されていなかったのか、なぜ語られなかったのかはわからない。史料に残っていない部分は、推測することしかできない。その中で言説や根拠のないイメージと現実の乖離を指摘することは非常な難しさを伴っている。

5. 現代日本との類似性

1920年代から80年、戦後から60年が経過した今日に至ってもなお、当時と同じような課題が存在している。その中から3つの課題を取り上げ、それを解決するためのアプローチを比較する。

まず、時代の「先端」として現れた女性に向けられる批判である。1920年代の「モダンガール」たちは、前時代の「新しい女」たちから軽薄で男性の性的対象になることを否定しないと批判され、保守的な人々からはジェンダー関係を脅かす存在であると批判された。そして今までは見られないような女性の型が現れたという事実が、「不埒」な女性が現れたと語られてしまう。(植田 1982) これはさまざまな時代に当てはまる事柄である。かつてフェミニストは、ジェンダー規範を逸していると批判された一方で、ウーマン・リヴ

と比べて男の視線を意識しているという批判もなされた。現在においても、少子化問題の原因は「女性の」非婚化・晩婚化であり、その原因は働き続けようとする勝手な女性だと批判される一方で、近年若い女性に専業主婦志向が広まっていて、保守化しているとの批判もある。さらに時代の先端であるとされた女性たちは、性的な独立をアピールしたために、性的規範の逸脱、淫乱であるといったネガティブなイメージで語られやすく、必要以上の非難を受けた。このように社会的に自立することと性的淫乱イメージが結びついていく傾向も、しばしば見られることである。

2点目は、メディアに描かれる女性像の問題である。様々な女性が性的イメージと結び付けられてメディアに登場することで、そのイメージが再生産され、現実反映される。さらに、再生産されたイメージがメディアに載るという悪循環が生まれる。「性的逸脱」イメージを付与されたモダンガールや「性的対象」としての職業婦人といった例である。現在でも、1990年代の「援助交際をする女子高生」イメージはメディアに載って広まった。女性がセックスシンボルとして使われている広告やグラビア、淫らな性体験がセンセーショナルに描かれた雑誌も数多く存在する。マスメディアも世間も、女性をセクシュアリティ抜きで語ることはできなくなっている。

以上2点に見られるように、いつの時代も女性は、論評の対象となり、受動的な地位にすることが多い。とくに若い女性は、優位である男性や年長者から批判を受け、社会の好奇の目、性的な視線を浴びてきた。その中で女性雑誌は、女性に発言と連帯の機会を与えた。現代ではさらにメディアが多様化し、女性自身が編集者の意図を介さずに様々な手法で情報を発信することもできるようになった。受動的な存在ではなくなることで、一方的な批判に対抗することもできよう。

3点目は、女性労働に対する価値観である。同じように職業に従事する女性であっても、オフィスワーカーと、家事労働者や工場労働者との間には格差があった。今日も、正規社員とパート労働者といった格差が存在し、高学歴女性はパート労働を忌避する傾向がある。工場労働、パート労働で働くことは家計の貧しさを露呈し、「女を働かせなくては食べていけない」夫や父親の不甲斐なさの象徴となってしまう。

また女性労働に対する評価は、社会・経済状況に応じて大きく変化する。たとえば震災や戦争といった大事変や、不況等によって、女性が「働かざるを得ない」状況になったり、失業者数の調節のために女性から解雇されたりといった事柄は、今も昔も存在している。1930年代、女性が働くことが当然とされたのは、言うまでもなく日本が軍国主義へと傾倒していったからである。同様にバブル崩壊後、夫の職が安定しない不景気の時代にも、女性は働くようになる。このように女性の労働の価値は、移り変わる国家の意図に左右され

る。

6. おわりに

時代が変化するとともに、女性をめぐる問題も変化するが、一方で変わらず存在するものもある。それらの共通の原因として、女性が受動的な存在であるという点があげられる。このために女性は国家や男性社会によって劣位におかれたり、根拠のないイメージをもとに批判されたりしている。しかし女性が能動的になれば解決するという問題でもない。かつて社会的な存在であろうとした女性は、そのめざす「社会」が次第に「国家」となり、軍国主義下の国民運動の担い手となった。決して女性の地位の向上にはつながらない国家の意図に、自ら取り込まれていったのである。もっとも、これは女性に限った問題ではなく、いつの時代も、他からの圧力を受けずに判断することが非常に難しいことになりはしない。

本書では、1920年代の雑誌分析を行うことで、消費主義による社会の変革と女性の地位の密接な関係、そしてマスメディアの影響力を明らかにした。そしてつくられたイメージと現実との乖離を明らかにした。現代の社会問題を考える際にも、言説やイメージと、実態を把握することは必要である。さらに現代では、マスメディアのあり方やその影響力も大きく変化している。知識人以外によって書かれた文章や資料、また男性の支配を受けずに書かれたものも、数多く存在する。形態の異なる資料を比較、分析することで、現代のイメージと現実の乖離を明らかにすることもできるのではないか。こうして虚実が明らかにできれば、現代の社会問題の解決の糸口を見つけ出すこともできるのではないだろうか。

<参考文献>

- Scott, John Wallach, 1999, *Gender and the Politics of History*, Revised Edition, New York: Columbia University Press. (=2004, 荻野美穂訳, 『増補新版 ジェンダーと歴史学』平凡社.)
 植田康夫, 1982, 「女性雑誌がみたモダニズム」南博編『日本モダニズムの研究』, プレーン出版.
 川村邦光, 1993, 『オトメの祈り 近代女性イメージの誕生』, 紀伊國屋書店.
 川村邦光, 2003, 『オトメの行方 近代女性の表象と闘い』, 紀伊國屋書店.

(おだ あきこ・修士課程)